

2020年9月13日 説教「一つとなるために」

エペソ人への手紙 4章 1～7節

今朝は会堂13周年記念礼拝です。教会について学んでいきましょう。

1. 召された者たちへの勧め (1節)

① 主の囚人 (1) 「さて、主の囚人であるある私はあなたがたに勧めます。」

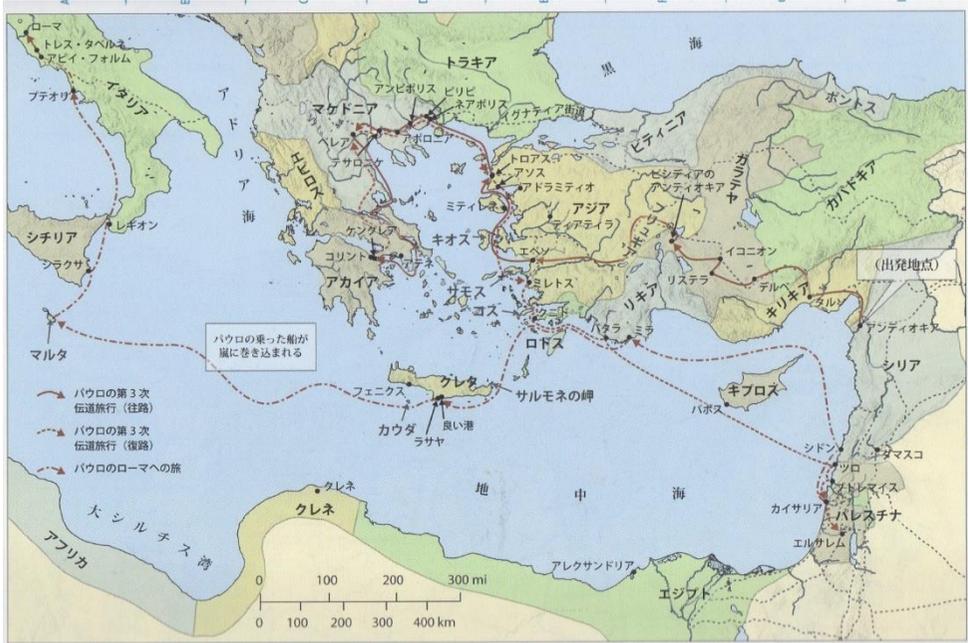
エペソ人への手紙は使徒パウロによって記されました。教会論が述べられています。さて冒頭で、パウロは自らのことを「主の囚人」という言い方をしています。実を言うと、彼は実際の獄の中にあつたのです。しかし、もう一方で、自らが主イエス・キリストの僕であるという意識がありました。その方に囚人のようにして仕えていたのです。このような言い方は、例えばローマ人への手紙 1:1 に「キリスト・イエスの僕」とあるように、パウロの自己紹介によく用いられていたのです。この書簡はエペソにある教会にあてられています。このエペソ書は4章以下が実際的な勧めになります。

② 召された (1) 「**召されたあなたがたは**」キリストを信じるということは、神の召しによります。ウェストミンスター信仰告白では有効召命という堅い言葉が使われます。恵みによって、救いの道に選ばれている人を、主なる神は確実に召してくださるというのです。それは、人間の意志や決意に先立つものなのです。人間の側では自分で選んだつもりであっても、選ばれたというのが正しいといえましょう。「あなたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ 15:16) とある通りです。

③ 召しにふさわしく (1) 「**その召しにふさわしく歩みなさい**」それほどありがたい恵みによって召されたのですから、召された者は、その召しにふさわしく歩むことが求められているというのです。でも、実際のところは召されたにもかかわらず、なかなかふさわしく歩めないというのが、多くのクリスチャンの実感ではないでしょうか。

2. 一致の勧めとその基礎 (2～4節)

① 謙遜、柔和、寛容、愛 (2) 「**謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、**」召された者たちへの具体的な勧めです。これは教会の兄弟との関係の心得です。謙遜は、神であるキリストが人間となられたところにその極致があります。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」(ピリピ 2:3) は人との関係における謙遜です。柔和はへりくだりと重なります。寛容は愛の定義の冒頭にあげられるほど (I コリント 13:4) ですが、心広く受け容れる心です。愛とは神の愛 (アガペー) です。その愛をいただいて、互いに忍耐し合うというのです。実際のところ、人間は自分以外を受け入れない性質が宿っているのです。自分が第一だからです。罪のあらわれです。



②御霊の一致 (3)「**平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい**」平和とは神との平和に基づきます。平和のきずなは、神の愛（アガペー）から生まれます。コロサイ書には「結びの帯」（3:14）という表現がなされています。このきずなで、結び合わされていくときに、教会の兄弟の交わりは、真の一致へと導かれるのです。「御霊の一致」とありますが、御霊なる神がとりなしてくださる一致です。教会においては、人間的一致ではまなりません。御霊に導かれてこそ、利己的で身勝手から解放されて、御霊の一致が生まれるのです。

③一致の根拠 (4)「**からだは一つ。御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。**」ここには一致の基礎あるいは根拠があります。4～6 節を通して、一つという言葉が七回出てきます。第一の「からだ」とは「教会はキリストのからだ」（1:23）とありますが、教会のことをさしていると考えられます。第二の「御霊」なる神が複数あるはずもありますが、他の霊を同格におきやすい者たちへの教えです。主なる神が人を召してくださった時に、もたらされた唯一の希望と同じなのです。

3. 一つであることと、キリストのからだ (5～7 節)

①主は一つ (5)「**主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。**」主は一つとありますが、三位一体の神の、子なる神であるキリストは一つということです。また、信仰が一つとういのも、救いに至る信仰も一つであることが伝えられています。さらに、バプテスマが一つであることも加えられます。バプテスマは洗礼とも訳せます。復活の主が弟子達に与えられた宣教命令は、すべての民にキリストの福音を宣べ伝え、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授けよとの内容でした（マタイ 28:18-20）。そのバプテスマは何回も受けるものではありません。信じて告白した者が一回授けられるのです。

②父なる神は一つ (6)「**すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののおちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。**」父なる神が一つであるといえます。そして父なる神は i. すべてのものの上に、ii. すべてのものを貫き、iii. すべてのもののおちにおられる方であることが伝えられます。つまり、この方は存在の源であることが告白されているのです。

③キリストの賜物 (7)「**しかし、私たちひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みが与えられました。**」この節は、内容的には次の段落に入ります。クリスチャンは教会のからだを担う者たちであることは前提です。主に召されてキリストを信じた者達は教会に加えられたのです。その一人一人には、恵みが与えられているというのです。そして、具体的な賜物が授けられ、それぞれに量りに従って応分の賜物が備えられているというのです。体の器官に不必要な部分がないように、それぞれが貴重な働きに召されているのです。

《結論》

キリストの教会に、人々は何を期待するでしょうか。一つには神の愛がそこに感ぜられるということでしょう。それは具体的には、その交わりの中に一致があるということでありましょう。ところが、実際には教会にも不一致が存在することも少なくありません。それは、クリスチャンは救い出された者で、聖化の過程にあります。相変わらず罪との戦いのなかにある者達だからです。有体にいえば、教会は罪人の集まりなのです。ですから、神からの恵みをいただかずに、集まるならばそこには様々な問題がや不一致が引き起こされるのです。

そこで、ここには、そのことを前提として、勧めがなされるのです。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い」とは、神の恵みと神の愛をいただかなければ、とても実現できません。また「平和のきずなで結ばれて、御霊の一致を熱心に保ちなさい」というのも、神からの平和、御霊なる神の一方的な関与がなければ実現は不可能です。でも、ここにはクリスチャンにも、できる限りの努力を傾けることが勧められているのです。私は最近、第一コリント 13 章を毎日一回は読むようにしているのです。愛の章です。かつては、このような尊い愛があるが、それらは神の愛なのだから、実行は難しいと思っていました。しかし、最近少し考えが変わりました。この愛は求めていかなければならないと思うようになったのです。もちろん、人間の力では難しいでしょう。でも主なる神が働いてくださるときに、私たちは変えられていくのだと思います。そして今朝勧められていることも、その愛の定義にあらわされた一端があります。真剣勝負で求めさせていただきたいのです。

今朝の聖書箇所には教会の一致のヒントがあります。からだ、御霊、召し、望み、主、信仰、バプテスマ、父なる神。これらが一致の基礎であり、根拠であり、これらに根ざしていくときに、教会の一致が根付いてくるということです。その中でも、今朝はバプテスマ（洗礼式）が行われますので、ここに注目したいと思います。聖礼典の一つであるバプテスマにも、一致の秘密が隠されています。洗礼は本日受けたとしても、60 年前でも貫いているものは一つです。なぜなら、そこには、キリストの十字架と復活の福音に基づく信仰の告白がなされているからです。私も高校二年生の時に福音をよくわからずに洗礼を受けましたが、そこにも恵みの主は働いてくださっていたのです。2000 年前にペテロの説教で 3000 人もの人々が洗礼を受けましたが、その洗礼とも同じ意味です。一つなのです。時代と民族を越えて一つであるバプテスマ（洗礼）。確かにこの出来事のなかに、教会の一致の秘密があります。それは、神が人を救うという出来事です。神様が私たちのうちに圧倒的に関わってくださる時です。人間が作り出すのではなく、神が特別に働いてくださる時です。だから人は神を見上げるのです。神を知るのです。皆が神を見上げ

ていくときに、教会にも一致が生まれてくるのです！主の恵みをさらに
仰いでいきましょう。